

[海外における語用論研究の動向]

「国際語用論学会 第11回(メルボルン)大会」

五十嵐 海 理

龍谷大学

1. はじめに

2009年7月12日から17日まで開かれた国際語用論学会(IPrA)第11回大会は、オーストラリア南東部のヴィクトリア州に位置するメルボルン大学(オーストラリアの名門大学集団であるGroup of 8のひとつ)で開催された。

本大会はたいへん規模が大きく、発表タイトル数も600以上あり、日本人の発表も100を超え、同時間帯に行われるパラレルセッションも12室に上った。大会期間中、水曜日を除いて毎日8時30分から18時45分まで、途中で昼食やコーヒーブレイクをはさみながらも長時間にわたって行われる大会は、体力的にもかなりきつところである。また、日本の学会とはちがい、大規模な学会であったにもかかわらず、メルボルン大学のキャンパス内にIPrAの開催を示す掲示がほとんどなかった。

また、ほとんどの発表がパワーポイントを使ったプレゼンテーションであり、ハンドアウトは配布されないことが多く、あったとしても、人数が多い会場では全員には行き渡らないこともあり、日本の学会とはかなり趣を異にするところであった。また、ポスターセッションの時間が決まっていたが、学会開始後であればいつでも貼っておくことができた。私は仕事の都合でポスターセッションには参加できなかったのであるが、昼食とコーヒーが配られるのと同じ部屋でポスターの展示も行われていたため、ポスターの発表者がいなくても、いつでも発表内容を見ることができた。

2. 基調講演

初日の開会式と基調講演は、Keith Allan氏の司会で、IPrA会長の井出祥子氏の講演と事務局長のJef Verschueren氏の挨拶があった。つぎに最初の基調講演がはじまり、Peter Sutton氏が登壇し、アボリジニの言語でしばらく話したあと、アボリジニの人たちの言語

が徐々に失われていくことについて講演 (Giving away language: Praxis versus ideology in the loss of linguistic diversity) した。その次の Ingrid Piller 氏の講演も社会的排除、とくに英語の習得とオーストラリア社会での移民の雇用についての複雑な関係について (Language learning, multilingualism and social inclusion) であり、政治的な論点も含まれていたせい、フロアからの活発な議論を呼んでいた。今回の大会は Diversity, context, and structure がテーマであったが、それにふさわしい基調講演で幕をあげた。

また、15日の基調講演では、Sotaro Kita 氏の司会で、Katarzyna M. Jaszczolt 氏が語用論的デフォルトと時間の関係について論じている。Jaszczolt 氏のデフォルト意味論 (Default semantics) は、「言われたこと」や implicature のような中間段階を廃して、語や句や文によってもたらされる情報に優位性を持たせず、真理条件に関係するものであればなんでも意味論のレベルとして扱うというものであり、意味の合成性もこのレベルで判断される。語や文の意味のほかに、認知的なデフォルト (志向性が強いものほどデフォルトになりやすい)、社会文化的なデフォルト (社会で当然視されているものほどデフォルトになりやすい)、意識的な推論 (社会のなかで知られていて、意識的に推論することで理解可能になるもの) が合成的混合表示 (Compositional merger representation) を形成する。基調講演の主旨は、これに時間のインデックスである t を加えて、DRS で表示したものが、時制を表わす、というものであり、法性による心理的距離を表示することもできるのであった。これはすでに *Representing Time* という題名でオックスフォード大学から出版されているとのことで、その本についての言及も講演中に行っていた。

直後の Yasuhiro Katagiri 氏の基調講演では、英語・アラビア語・日本語の話し手による合意形成について、たくさんの映像資料からボトムアップに分析する枠組みが紹介された。同じキャラクターが登場する絵の描かれたカード (ランダムに並べられている) を提示された2人の被験者が、相談しながらそれらがひとつのストーリーになるように並べ替えるというタスクを行う姿が映像化されており、identity と commitment と authority という3つの要素を用いながら、それぞれの言語の話し手が合意形成において異なったやり方をしていることを明晰に分析してみせた。

また、仕事の関係で聞くことができなかつたので紹介できないのが残念だが、Janet Holms 氏の職場におけるアイデンティティ形成についての基調講演も最終日に用意されていた。

3. 研究発表

研究発表は、Panel と呼ばれるワークショップ形式の口頭発表と、その他の口頭発表、ポスター発表があった。12部屋もパラレルセッションがあるので、網羅的に説明することは不可能であるが、大まかにいえば、この大会で扱われたトピックは、①ディスコース

の構造にかかわるもの、②社会や文化にかかわるもの、③政治的な考え方にかかわるもの、④表現と解釈の関係にかかわるもの、⑤歴史にかかわるもの、などがあり、語用論がたいへん広い裾野を持った分野であることを感じさせるものであった。もちろん、これらの要素は分離不可能であり、ひとつの発表にいくつかの要素が含まれていることが多い。以下、①～④までは筆者が実際に拝聴した発表を中心に少し内容を見ていきたい。⑤はプログラムを参考に内容を記す。

- ① 16日午前に行われた Sandra Thompson 氏と Elizabeth Couper-Kuhlen 氏の共同研究では、苦情を述べるときに仮定法の条件文を利用することで、今は成り立っていないことを指摘して、交渉の余地を確保するというストラテジーが採用されることが紹介された。
- ② 14日午後の Ping Pan 氏の発表では、教授とその学生たち（香港人、アメリカ人、中国人）の英語のメールを比較することで、それぞれの説得の方法の文化的な違いを明らかにした。16日午前、Scott Saft 氏と Sachiko Ide 氏によるパネルでの Keiko Abe 氏の発表は、日米の悩み相談のラジオ番組を素材に、ホストが電話で番組に参加している相手にどのようなアドバイスを与えるかに焦点をあてて説得方法の違いを文化的に考察する研究であった。
- ③ 先に述べた Ingrid Piller 氏の基調講演のほか、北京オリンピックでの各国のナショナリズムの高まりを新聞などマスメディアの報道を素材に分析したものに、Yasuko Kanda 氏、Jun Ohashi 氏、Chie Yamane 氏の共同発表があった。
- ④ 13日午後の Kyoko Ohara 氏と Jan-Ola Östman 氏による構文とフレームについてのパネルでは、たとえば Russell Lee-Goldman 氏ほかの発表で、省略表現（とみなせる if you want, I was going to say など）がディスコースで果たす役割を、フレームを使って説明していた。Mirjam Fried 氏の発表では、チェコ語の *jesli* (= if) が従属接続詞として機能することをフィルモア流の構文文法で説明していた。
- ⑤ 14日午前の Hiroji Fukumoto 氏の発表では、シェークスピアの英語の命令文に生起する主語の多様性とその度合いと文法化の度合いの関係について論じ、Yukiko Moriyama 氏と Ryoko Suzuki 氏は「はべり」の謙譲語から丁重語への発展を古今和歌集の例を挙げながら説明した。

4. まとめ

本大会では、このように、基調講演でも、少数民族の言語から、社会と言語の関係、語用論と意味論の関係、合意形成、アイデンティティ形成まで、広範囲にわたる研究が紹介され、研究発表でも上述のような多様なテーマで発表が行われた。日本であれば個別に学

会が存在する分野がひとつの学会のなかで共存するというのは、たいへん興味深いものであった。

なお、次回の IPrA は、2011 年 7 月 17 日～22 日にマンチェスターで開催予定である。